

平成27年度 フィリピンへの寄贈式典と現地調査の報告書

出張先：フィリピン共和国マニラ

期間：平成28年2月6日～15日（10日間）

出張者：能勢規弘（報告者）

現地パートナー：JVR 財団 責任者：Mrs. Gina Bulanhagui

同随行者：Mrs. Clara Malblot, Mr. Jessy

結果：

1) 寄贈台数 90台

2) 被寄贈団体 8団体；：()内は寄贈台数

Tahalang Walang Hagdanan (13台), Philippine Cerebral Palsy (15台),

Norfil Foundation (15台), Create a Job for the disabled (10台),

UERM Medical Center (8台), Independent Living Learning Center (5台), Project Teach (9台),

Department of Education Rizal Division, (15台)

3) 寄贈日前後に訪問した施設：8団体、3民家

Buhay San Rafael, Chosen Children Village, Elsie Gaches, Hospicio de San Jose, Project Teach,

Rehabilitation-and-Empowerment-of-Adults-and-Children with-Handicap Foundation, Inc.

(Independent-Learning Center),

Norfil Foundation 傘下でミンドロ島に居住する3軒の民家と社会開発福祉省支部の主催する

月例家族会の集会現場、Sampaloc Elementary School (リサール州タナイ市内)

Philippine Cerebral Palsy, Tahanan Walang Hagdanan

4) 認識した事実と課題

4-1) フィリピンでの車椅子の寄贈は2009年に始まり、今回で、6都市24施設に配布したことになり累計で531台になりました。その内、8施設に複数回寄贈されています。

ASSOCIATIONS	Area/Region	*		**			TOTAL		
		2009	2010	2011	2012	2013		2016	
2009									
1	TAHANANG WALANG HAGDANAN	Luzon-Taytay, Rizal	42	24			16	13	95
2	HOSPICIO DE SAN JOSE	Luzon-Manila	17						17
3	SERVANTS OF CHARITY	Luzon-Silang	12						12
4	FR. MONTI FOUNDATION	Luzon- Novaliches	7						7
5	MISSION OF CHARITY BROTHERS	Luzon- Manila	2						2
2010									
1	CHOSEN CHILDREN	Luzon- Silang		12			3		15
2	NORFIL FOUNDATION	Luzon- Quezon City		12		20	17	15	64
3	ELSIE GACHES	Luzon- Alabang		37		20	10	15	67
4	PHIL. CEREBRAL PALSY	Luzon- Makati		12		15	19	15	61
5	BAHAY SAN RAFAEL	Luzon- Tagaytay		12			2		14
6	PATUBAES	Luzon- Paranaque		12					12
2012									
12	CREATE A JOB FOR DISABLED	Luzon- Pandacan				10	10	10	30
13	MISSIONARIES OF CHARITY	Luzon- Tondo				15	5		20
2013									
14	MOST HOLY TRINITY	Luzon- Sampaloc					7		7
15	HOUSE OF HOPE- DCCFI	Luzon- Davao					23		23
16	UCCP SOCIAL CONCERNS	Luzon- Davao					21		21
17	KAAKBAY CHARITY	Luzon- Davao					3		3
18	MAHARLIKA CHARITY FOUNDATION	Luzon- Davao					14		14
19	MISSIONARIES OF CHARITY- DAVAO	Luzon- Davao					9		9
20	TEMPLE OF PRAISE FELLOWSHIP	Luzon- Davao					1		1
2016									
21	PROJECT TEACH	luzon- Mandaluyong						9	9
22	INDEPENDENT LIVING LEARNING CENTER	Luzon, Mandaluyong						5	5

23	DEPED RIZAL	Luzon, Taytay						15	15
24	UNIVERSITY OF THE EAST	Luzon, Quezon City						8	8
TOTAL NO. OF WHEELCHAIR/YEAR			80	121	0	80	160	90	531

531

- 4-2) 複数回寄贈した施設を訪ねると、過去に配布した車椅子が経時変化でどのような車体の状況になって来ているのかを過去の同様の機会にも確認したのですが、今回は更に2年を経過していたので、状況が更に悪い方に進んでいることが分かり、対策の必要性を実感させられました。
- 4-3) 日常管理がなおざりにされ車椅子が不自然な状態に置かれると、故障や破壊の度合いが進行し、また、一部の部品の故障や部分的な摩耗がひどくなっていることも目立ちました。
- 4-4) その程度は同居の家族や設職員などの管理への関心と世話の行き届き具合で、かなりの差が生じて来ていることも事実であり、そのことは今回訪問しなかった施設や家庭でも同様に起こっていることが想像できます。
しかし、そのような日常管理の差は一般傾向として、親や家族と一緒に生活しながら近所のリハビリセンターなどの施設に通って体力増強や勉強の機会を得ている形態(所謂 CBR=Community Based Rehabilitation System) と孤児達を施設に収容して世話している形態との間に顕著なものがあることを、今回の現場訪問を通して確認できました。端的に言うと、CBR に属する家庭生活では、家族の注意が車椅子の状態にまで行き届く度合いが高いので、車椅子の痛み度合いが軽微に留まっている上に、児童への躰と教育がより良く実施されている事実があります。例外は Chosen Children Village という孤児院とミンドロ島で訪問し現場確認した貧農に存在しただけでした。
一方、孤児院での職員に、そこまで細やかに気を回してくれることを期待するのが非現実的であるのも事実です。加えて、孤児院で居住する児童は手持ち無沙汰で自由に遊び、また、健全な児童たちが職員の目の届かないところで、車椅子の構造などに興味を見せて部品を取り外して遊んだりして、挙句の果てには、部品を紛失してしまうことも、しばしば起こっているようですから、孤児院で使われている車椅子に故障や摩耗の頻度や度合いが高いのは当然であるようです。
- 4-5) そうした事実から、私には、フィリピン向けの車椅子寄贈が新段階を迎えていると推断できたので、マニラ滞在中に、過去に寄贈した子供用車いすの使用状況を、より克明に調査し分析することを思い立ちました。
その結果として、中古の子供用車いすを日本で収集して製造整備し、その後、それらを現地に送って、そのまま寄贈するという従来のやり方は、早晚、そこに矛盾を抱えることになるだろうという危機感を強く抱くようになって来たのです。今後、そのことに関してより真剣に考え対策を検討せねばなりません。
- 4-6) フィリピンでの車椅子の寄贈が2009年から始まり、先日の90台の寄贈で、累計531台に達する中で、古い物は既に5~6年間も使われ、その間に使用者である障害児の身体もかなり大きく成長して来ているので、車椅子自体のサイズがその児童の体形に合わなくなって来ている事例も確認できました。
そうでなくても日常管理の劣っている所では、車体の骨格の金属パイプに錆が生じたり、シートや背当て布などが摩耗して破れたりほころびが生じていたり、或いは、日常の空気圧の維持を怠ったためにタイヤや空気を保持するチューブがペチャンコになったまま長期間放置されたことが原因でひび割れを起こしてしまい、空気を保持できないままの状況が常態化している(当たり前になっている)場合も見られました。
- 4-7) しかし、日常管理の程度は、各施設職員への注意喚起で改善できる余地がありますが、児童の身体的な成長によって車椅子のサイズが合わなくなることは不可避であり、その問題の唯一の解決策は、より大きな車椅子に乗り換えてもらうことしかありません。その問題の解決策を提示したり、具体的に提供することなく、無策のまま放置することは許されないと云わざるを得ません。
勿論、私の所属する会でも、「子供の車椅子のニーズをそこまで心配し世話をして行くことは至難なことであり、それは夫々の国策で対応してもらわなければならない」と主張する人々が居られます。「私たちの会の使命は、この世に誕生して以来、車椅子を使って生活する安楽と利便から無縁であった肢体不自由児に車椅子を提供して、一時的、短期間だけの使用に供するという行為だけで十分であり、それ以上の段階に進むことにまで援助の手を伸ばすのは不可能であり、それまですべきではない」と主張する仲間のいることも事実です。

しかし、私は、その説には異論を禁じ得ません。何故なら、「そうした寄贈行為は極めて中途半端で、罪作りで独り善がりの慈善事業に陥るだけに過ぎないのではないか」と思うからです。極論すると、「甘いお菓子の味を知らない子供に、一度だけお菓子の味を知らしめて、その後のケアはしないという罪づくりに似ている」と思うからです。それならば、始めから、甘いお菓子は与えない方が慈悲でありましょう。

そうした罪づくりが不可避であり、且つ、是であるとするなら、「子供用の車椅子ではなく、大人用の車椅子を寄贈することに徹する方が適切でしょう」それならば、「身体が大きく成長して行く子供たちに大き目の車椅子を始めから恒久的に使ってもらえる」からです。

そうせずに、日本製の子供用車いすを、各子供に一時期だけ使う機会を与えるのであれば、彼等が成長して車椅子が身体に合わなくなり、小さくなった車椅子の使用をあきらめるのを強いることとなります。それは、何のことは無い、「日本で粗大ゴミ化した子供用車いすを外国に放り投げたかのごとく、4～5年後に、その国で粗大ミ化させてしまう」ことになるでしょう。それこそ、「子ども用車いすを海外に寄贈して安楽な生活をおくってもらおう」という当初の意図から大きく逸脱すると申しますか、矛盾を生じることになると思うのです。

4-8) それを回避するには、私たちのボランティア活動では従来以上に意識して、「サイズが大小異なる車椅子を複数混合して寄贈する」ように心掛け、そして、被寄贈国での受益施設に対しては、車椅子の使い回しの運営方針を実行することの大切さに理解を深めてもらい、「大き目のサイズの車椅子の配布と小さ目の車椅子の引き取り交換のサイクルの実践」を促進するように求めて行くのが望ましいと考えるのです。

そして、車椅子の寄贈は、各施設に対して一回限りで終わらずに、継続して、数回行っていくことで施設には比較的多くの台数の車椅子を傘下の児童に提供できるようになり、上記のように、児童の成長で車椅子が小さくなり身体に合わなくなったら、大き目の車椅子を入手して、その使いまわしのサイクルを運営できるように次の寄贈の機会を迎えてもらうというようなシステムを確立するように仕向けるというか、指導して行く必要があるのです。

私は、このことの必要性を、6年前にフィリピンで寄贈を始めた時に既に予知していたのですが、いよいよ、それを一層確実に実行して行かねばならない時期が来ていると、今回の訪問で強く思わされました。

4-9) 被寄贈国の現地パートナーがフィリピンの場合は、潤沢な資金を確保できる事業システムを基盤に持っていて、その上に立って数種の慈善事業を推進している財団を任命しているのですが、その財団と共同して、同国の各地に所在する肢体障害児施設に子供用車椅子を寄付するという仕組みで運営して来ています。

そして、寄贈を求めて来るそれらの施設が要望して来る台数の全数を一度に引き渡すことをしないで、少なめに寄贈するようにして、次回の寄贈を期待させ、当方が要望する運営規則を守ってくれるようにし、そして、次の寄贈でも、また、要望よりも少ない台数だけを手渡すという運営を行って来ています。この寄贈方針が、各施設内で、小さくなった車椅子を引き取り、より大きな車椅子を渡すという「使い回し」のサイクルを扱うことを可能にします。

4-10) 身体が大きく成長した子供たちから、小さくなり古くなった車椅子を引き取って、より大きなサイズの車椅子と交換するには、子供たちが所属する当該の施設がその方針を率先して行うように仕向けねばなりません。そして、引き取られた小さくて古くなった車椅子を別の子供たちの使用に供するには、それらを清掃し、そして修理・調整することをフィリピン国内で行える体制を作り出さねばなりません。その作業にも車椅子を要望して来る施設に協力してもらう可能性を作っていきます。

4-11) そして、その作業をどこで誰が費用を負担して行うのが妥当であるのかを決めねばなりません。即ち、その体制とか作業場所とか作業人材の確保とか、そして、整備のための部品とか道具をどのように整えるのかも決定してから、そのような活動を実施に移す必要があります。

既に、以上のことについては、今回のマニラ滞在中に現地のパートナーである財団の責任者と大筋を打合せ基本的な合意を取り付けました。

5) 使い古された子供用車いすをフィリピンで整備再生する体制作り (続編)

小さくなり古くなった車椅子を引き取って、それらを別の子供たちの使用に供するために、それらを清掃し修理・調整する作業をフィリピンで始められるようになれば、

- 5-1) 日本で収集する車椅子に行っている同様の仕事を日本で割愛し、フィリピンに移管して、即ち、現地で行うことも可能になって来るでしょうから、日本での私たちの活動の負荷がフィリピン向けに限っては大幅に縮小できそうです。
同じようなことをマレーシアで既に実行し始めていると聞いていますが、その他の国でも、そのようなことが実行できるようになれば、日本での仕事の負荷は下がって行くでしょう。
- 5-2) それに関して検討すべき課題は以下の通りです。
①日本から到着する車椅子の保管場所 ②清掃整備の作業場所 ③費用負担の引受人
④作業を監督し実施する者 ⑤人材の確保 ⑥作業者の技能訓練 ⑦部品と道具のリストと確保
- 5-3) 「保管場所と作業場所」の課題は比較的簡単なことで解決は現地のパートナーに任せることができます。
- 5-4) 「費用の負担を誰がするか」は議論の分かれるところかもしれませんが、私見では、この車椅子寄贈の現地の受益者である施設が費用を負担すべきであると考えています。確かに、車椅子を使う子供達やその家庭が一義的な受益者ではあるのですが、新たにサイズの大きな車椅子を宛がわれる受益者の多くは赤貧の市民ですから、彼らに費用の支払いを強いるのは酷であり無理なことです。一方、現地のパートナーである財団は最も資金的にゆとりのある団体ですが、こうした費用までもその財団に負担させるのは筋違いであると私は考えます。そこまで「オンブにダッコ」に馴れっこになると、寄贈を受ける受益者の自立性が損なわれてしまい、目覚めや自立への努力の機会を奪うことになるからです。
少なくとも、現地に寄贈された車椅子の摩耗や破損については現地肢体障害者施設の費用負担で修理し再生して再使用してもらふべきだと私は信じているのです。勿論、日本で清掃し修理し船積みして現地に送る車椅子については、それが継続する限りは、従来通り、その費用は当会で負担することを継続することになるでしょう。
- 5-5) その他の課題、即ち、④作業を監督し実施する者⑤人材の確保の方法、⑥作業者の技能訓練 ⑦部品と道具のリストと確保については、現地の受益施設や財団の系列の製造会社、或いは販売会社から作業場所の提供を受けることにし、作業人材については、修理される車椅子を使う機会を与えられる肢体障害児の保護者、或いは、当会の現地のパートナーである財団から奨学金を受領する学生にボランティアとして労働奉仕をお願いするというプランを腹案として検討しています。
半強制的な労働奉仕になりますが、貧乏で無職の人々が圧倒的に多いフィリピンでは無償労働に合意してボランティア作業を率先して引き受けてくれる例が極めて少ないので、こうした苦肉の策に頼ろうというのが、現地の財団の考えです。
- 5-6) なお、補修部品と道具の中で、現地で調達が出来ない物は日本から無償提供する積りです。そして、現地調達できる部品は現地の財団と受益施設で購入してもらふ予定です。タイヤやチェーンや関連の金具、潤滑油などは台湾製や中国製が入手できることも確認済みです。

このようなプランを、当面、一カ月以内で、確定し、来る4月に、既に日本から送付済みの未整備の車椅子20台に加えて現地で修理せねばならなくなっている車椅子10~20台の清掃・修理・調整などの再生作業を実施してみる積りです。

蛇足になりますが、今回の現地調査で再認識したことは、子供用車いすの寄付のような慈善事業の運営においては、「現地パートナーの資格」と現地での寄贈活動の「運営上の規則とルール」について、確固とした認識とか信念が重要であるということです。

即ち、①資金を潤沢に確保できること ②寄贈先である現地施設が要望して来る台数を一回の寄贈で充足することは得策ではなく、少な目に引き渡して、次回の寄贈を期待させて、当方の方針を守らせることです。

以上の詳細について、当会の各位から意見を頂戴しながら、暫定的な方針を決めて行き、そして、試行錯誤を重ねながら、この課題の解決の最終的な方針を作っていくことを提案します。

以上